

晴れの日が続いた。

若犬は最近こう思いはじめていた。

…こうしてゴンとさすらって行くのも、悪くないな…

なんだか自分がいっぱしの野良犬になった気分で、少しやさぐれた横歩きを試みたり、走ったり遊んだり…。

道すがら、民家の裏庭に入って庭に埋められていた生ゴミを掘り返して人間に追いたてられてみたりもした。時には何日も食べ物にありつけずに彷徨ってひもじい思いもするが、庭につながれている他所の飼い犬をからかったりしては、野良犬の自由さを楽しんだ。

また時々、あの赤犬が現れてゴンに媚を売った。赤犬はへつらうようにゴンのところにしばらく付きまとっていたかと思うと、いつの間にか姿を消し、またひょっこり現れた。

若犬はこの赤犬が嫌いだった。あの媚びへつらいが厭だった。

しかしゴンは

「ヤツはヤツでああして生きてるんだ。何かの時には役に立つ事もあるんだ」

と言って、付きまとうままに放っておいた。

若犬はこの狡猾な赤犬に、どうしても馴染むことができず、あの犬が現れる度に苦々しく思った。

そんな時でも、ゴンは若犬のすることを黙って見ていた。

そして時折、何かを考えるように遠くを眺め、何も言わなかった。

明るい晴れた日々が続いた。

堤防の土手は草むらが茂り、菜の花の黄色から鮮やかな緑色に染まった。

麦畑の広がるあぜ道を二匹は歩いていった。

ヒバリが空高くさえぎり、辺りは長閑な田園風景が広がっている。

不意にムク犬のゴンが立ち止まって言った。

「なあ、小僧……」

「はい」

「前から思ってたんだが……。ここから先はお前ひとりで行け」

「え？……おじさん……」

「俺についていてもロクなことはない……」

「……でも、僕一人では……」

「これからは一人で生きてかなきゃならないんだ。だれもお前のことなど構っちゃくれない……」

「そんな……」

「いや、そうなんだ……」

「でも、おじさんは……僕を助けてくれたよ……」

「ああ……」

「それに、獲物の捕り方や、隠れる場所の見分け方なんか、いろいろ教えてくれたよ……」

「ああ……だが、あとは一人でやっていくんだ……」

「……」

「不憫だが……。そうしたもんさ……」

若犬は泣きそうになった。

ゴンは、ゆっくりとした語調で続けた。

「いいか小僧、よく聞くんだ。お前は根っから飼いだ……分かるか。野良としてやってくには、チつとばかし、かったるい……」

「……」

「そのかったるいところが、命取りになる……」

……そんなこと言ったって……

「あの牧場の木の陰に隠れてた時も、おれの気配が分からなかっただろう……」

若犬は、ハツとした。

……そうだった！……

ゴンの言うことは尤もだった。あの日、堤防の柵に座って牛を眺めていた時も、牧場の番犬アレックスの気配に、すぐには気がつかなかったのを思い出した。

「な、わかつたる……お前は、どこぞの家に飼われて暮らす方が、よっぽど幸せなんだ……」

「おじさん……」

「お前は、まだ子供だ、図体はデカいがな……。今ならまだ間に合う。早いとこどっかの家に棲みつくんだな……」

「……」

「お前は見てくれもなかなかどうして立派なもんだぜ……。それに氣立てもいい……。いつまでも野良やってないで、どっか好い家をさがすんだ……。飼い犬に戻って、いい家に飼われりゃあ、りっぱな番犬になれるさ……。一生食いつばぐれはない……。番犬も悪くない……」

「そんなこと言ったって……」

「もっと自信を持って……」

「……」

「自信と……それから誇りを忘れちゃいけない……」

「……」

「あと、名前な……。これからはお前が自分で自分の名前を持つんだ。俺あ以前、きつい事を言っちゃまったが……。つけてもらった名前が気に入ってるんだったら、それを選べばいい。厭なら別のヤツを自分で決めればいい……。これからは何でも、自分で選んで自分で決めるんだ……」

若犬は、鼻をクウクウ鳴らした。殆どべそをかいていた。

長い沈黙の時間が流れた。

雲ひとつない高い空、ヒバリのさえずりだけが軽やかに響いた。

「さて……俺あ、こっちへ行く……小僧、お前はそっちに行け。家のたくさんある方へな……。いい加減に川から離れるんだ……。じゃあな……」

「おじさん……」

「いつまでも、むかしのことにしがみつくのはやめるんだ。前の飼主のことはもう置いて、自分自身のこれから先のことを考えるんだ……」

「……おじさん……」

「……その『おじさん』は……やめろ……」

「……お……おじ……」

「……いつか、いいこともあるだろう……」

「……」

「じゃあな……」

「ゴン……」

「……ついてきたら承知しないぞ……」

ムク犬は、ちよつとだけ牙をむき出し、威嚇して見せた。

若犬は二・三步後ろへ下がった。そして、諦めたように向きをかえ、尻尾を引きずるように下げると振り返り振り返り、ムク犬の元を離れて歩き出した。

「……いいか、誇りを忘れるな……達者でな……」

……おじさん、さよなら……

つづく